

## 女優ナナ (1934)

NANA

メディア 映画

ジャンル

製作国 アメリカ

色彩 B&amp;W

時間 88分

初公開日 1935/01

公開情報 劇場公開

## 【解説】

1868年のパリ。一羽のカラスが墓地に舞い降りると、非業の死を遂げた、少女ナナの母の埋葬中であつたーというゴシック的な開幕がなかなか良い雰囲気、女流監督アーズナーによるゾラ作品の映画化。製作者ゴールドウィンは、主役のA・ステンを第二のグreta・ガルボとして大いに売りだそうとしたが、主人公の淫蕩な感じはうまく出している、会う男を片っ端からとりこにするナナの神秘性の表現は彼女には高望みであつた。が、作品自体はハリウッド的にかなり原作から甘ったるく逸脱しながらも、明晰で理知的な仕上がりとなつて、見終わつての印象はさらりとしてべとつかない。

母と同じ轍は踏むまいと上昇志向の高級娼婦ナナは、カフェで友人といふ所をからんできた将校を噴水に突き飛ばし、大劇場主グライナーのおぼえめでたく、彼のショウに出演するようになる。徹底的に演技をたたき込まれ舞台に立つた彼女は生来の媚態を發揮し、一躍、男性観客の注目の的。そして先の将校の同僚ジョージをはじめ、大公やグライナーに言い寄られる。弟ジョージとナナの交際を知つた大公の補佐官、ムファ大佐は彼女から弟を遠ざけようと、彼をアルジェリアの部隊に送る。しかし、そんなトラブルがグライナーの逆鱗に触れ、ナナは劇壇を追放された。申し訳なく思つた大佐は彼女に謝罪に行くが、彼女を好きな本心を見破られ、熱いキスを交わすのだった。そして、彼女と愛の巢を営むが、そこへジョージが訪ねてくる。あわや一触即発という瞬間、隣でそのやり取りを涙ながらに聞いていたナナは、己に引き金を引いて全ての決算をつけるのだった……。G・トーランドの濡れたような画調と、ゴールドウィン作品らしい時代風格の再現の緻密さも見もの。

## 【クレジット】

|    |  |   |
|----|--|---|
| 監督 | ドロシー・アーズナー   | Dorothy Arzner  |
| 製作 | サミュエル・ゴールドウィン  | Samuel Goldwyn  |
| 原作 | エミール・ゾラ  | Emile Zola  |
| 脚本 | ウィラード・マック<br>ハリー・ワグスタッフ・グリブル   | Willard Mack  |
| 撮影 | グレッグ・トーランド   | Gregg Toland  |
| 音楽 | アルフレッド・ニューマン   | Alfred Newman   |
| 出演 | アンナ・ステン<br>ライオネル・アトウィル<br>フィリップス・ホームズ<br>ミュリエル・カーランド<br>リチャード・ベネット<br>メエ・クラーク<br>ルシル・ボール | Anna Sten<br>Lionel Atwill<br>Phillips Holmes<br>Muriel Kirkland<br>Richard Bennett<br>Mae Clarke<br>Lucille Ball |